

いざ再生へ

所長 平野 忠



陸奥湾の水も温み、ホタテの産卵も始まって、これから本格的に始まるラーバ調査や各種調査に向け、研究員達も準備に余念がないといったところです。

40周年記念事業について

第111号（平成20年3月発行）でお伝えしたとおり、当研究所は今年度で創立40周年を迎えることができました。これもひとえに関係者の皆様方のご支援のお陰であり感謝申し上げます。

40周年を記念して、昨年11月、青森市において記念講演会を開催し、私の大学講座の後輩でもある北海道大学の桜井教授にご講演をいただいて大変好評を博しました。また、講演会終了後の祝賀会では、歴代の所長さん達始め元職員の方々と旧交を温め、盛会の内に終えることができました。講演会、祝賀会にご出席いただいた方々に改めて厚くお礼申し上げます。

また、もう一つの課題であった記念誌の発刊については、昨年来鋭意作業して「青森県水産増養殖研究四十年の歩み」としてとりまとめ、先般関係者の皆様にお届けしたところです。追想や各種資料をご提供いただいた方々、通常業務のかたわら編集に当たった担当者の方々に感謝いたします。

山本護太郎賞について

本年1月7日には、今年度創設された山本護太郎賞をいただきました。この賞は、本県の農業分野では稲やりんごについて研究功労者の名前を冠した賞があることから、水産分野においても同様な賞を創設しようという植村県漁連会長、三津谷むつ振会長のご意向でできたもので、ホタテガイ研究の第一人者であり、昭和50年のホタテ大量斃死の際に検討委員会の委員長を務められて、陸奥湾ホタテの適正養殖に道を開かれた故山本護太郎博士のお名前を冠したものです。今回の

受賞は、当研究所の40年間にわたるホタテガイを始めとした研究の業績を評価されてのことであり、誠に有り難く、意義深いことだと思います。

組織統合と独法化について

さて、40年間親しまれてきた当研究所ですが、県の行財政改革の一環で4月1日をもって水産総合研究センターに統合されると共に、地方独立行政法人産業技術センターへ組み入れられることとなりました。そのため、残念な事ながら、当研究所の名前は3月末日をもって消えることとなります。

しかし、これまでの研究はそのまま水産総合研究所に引き継がれ、農工連携などのメリットを生かして研究内容も充実を図っていく予定です。したがって、この一連の動きは終わりではなく「再生」と捉え、手を携えて新たな海に漕ぎ出して行こうとしています。

研究所だよりについて

この研究所だより（最初はセンターだより）は、昭和54年5月の創刊以来、年に3～4回のペースで30年間にわたり発行し続けてきました。このたよりは、研究報告などの固い内容のものを分かりやすく、親しみやすく読んでもらえるよう、また最新の情報をリアルタイムでお届けすることをモットーに、研究成果を発信してきました。しかし、前述の統合、独法化によって研究所の名前自体がなくなるため、今回の第114号をもって一区切りをつけることになりました。これまでのご愛読に感謝申し上げます。

来年度からは、その精神を引き継ぎ、内水面研究所を含めた水産総合研究所だよりのような形で、内容をより充実してリニューアルしたいと考えておりますので、その際はまたご支援をお願いいたします。

退職に当たり

最後に、私事で恐縮ですが、この3月で県職員を定年退職することになりました。昭和46年の奉職以来38年間の勤務になりましたが、これは当研究所の歴史40年間とほとんどオーバーラップするものであり、また、38年間のうち当研究所での勤務は計4回で18年

間に及び、県職員としての勤務年数の半分近くを占めています。また、当所の再生と共に退職することから、文字通り研究所と運命を共にするという自分勝手な感慨を抱いています。

この間、アワビ人工採苗、ホタテガイ採苗予報・増養殖、ヒラメ資源管理などに貢献したと、これまた自分勝手に評価しておりますが、研究に特化したわけでもなく、行政マンとしても中途半端で終わったという

のが本音です。しかし、どの部署にいても、上司、同僚、部下に恵まれ、楽しく仕事をする事ができたということは自信を持って言えます。

来年度から優秀な部下達は独法での荒波にさらされることになるわけですが、その能力を十分に活用し成果に繋げていただけるよう、よろしく願いして挨拶に代えさせていただきます。